

二つの祖国と税～母との会話を通して～

竹田市立竹田中学校 3年 廣末 啓樹

蛇口をひねれば普通に、きれいで安心な水が出る。これが当然の毎日にいると、それがどれだけ幸せなことか、つい私達は忘れがちになってしまう。税について考えてみたが、買い物時の「税込み」「税抜き」価格の消費税の体験くらいしか、ほとんど思いつかなかった僕は、母に助け船を求めることにした。すると母から、「啓樹ハ、学校トカ病院ニ、アタリマエニ行ケテルヨ。ダカラ、トテモ恵マレテルヨ。」と返ってきたのだった。

僕の母親は、フィリピンの出身だ。十九歳の時、家族を少しでも支えて楽にしてあげたいと、仕事を求めて単身来日した。後に父と出会い、今も二人して毎日頑張ってくれている。そんな母が生まれ育った祖国は、人口に対して雇用が少なく、日々、仕事探しに追われる人、学校に通えるお金が無くて、道端で物売をしている子どもが沢山いたと続けた。僕も幼い頃に一度、母の久しぶりの里帰りに一緒についていったことがある。首都マニラからは、バスで片道六時間程かかる田舎町が母の故郷で、市場が沢山出て賑わっていた記憶がかすかに残っている。母には弟妹が多く、飲み水やシャワー、洗濯など、家族が使う水を汲みに、日に二十回以上も、家と井戸を何度も何度も往復していたこと、ゴミは近くの空き地に埋めるか、もしくは乾かした後に燃やすか、処分一つとっても、手間暇がとともかかったこと、主要な道路以外は未舗装で、雨が降れば直ぐにぬかるむこと。普段は全く意識することなどなかったけれど、こうして僕の二つの故郷を比べてみると、同じ田舎でも随分違う。僕の身の回りには、学校もあれば、教科書も無償だ。警察署や消防署の公共サービス、図書館、公園、ゴミ処理場、上下水道といった公共施設など、税に関係するもので溢れ、豊かな毎日を過ごせている。これも税のお陰なのだと実感した。税が僕達を様々な危険から守り、社会をより良くする機能だということがよく分かった。税制と分配が整ったこの国に生まれたことを、感謝したいとも思えた。水道のように、税のあまりの身近さに、その恩恵が見えなくなっているのだと、気付かされたような気がした。

数年前にフィリピンでも、義務教育は無償となったようだ。でも、まだまだまともに通えていない子どもが少なくないらしい。一方、僕の暮らす町は年々、人口が減少し、産業や医療もやがて衰退すると不安視されている。そこで、総合学習の授業で、“故郷のお役に立とう”、“未来の故郷で起業しよう”という課題に今、挑戦中だ。もし、県内一を誇る基幹産業の農業分野で人手不足が心配されるのならば、国家間レベルの経済支援も大事だが、仕事を必要とする母の祖国の人々を、働き手を求める父の祖国に招く民間レベルの協力は出来ないか。働くという人間本来の喜びと、納税という社会貢献への誇りのために。僕も二つの祖国に役立つ担税者にいつかきつと。